



【巻頭言】

「I-Scover: IEICE Knowledge Discovery」 通信ソサイエティ会長



田中 良明（早稲田大学）

いま学会再編の嵐が吹き荒れています。出版業界で起こった再編の嵐が学界にも来ました。出版業界では、雑誌の電子ジャーナル化が十数年前に本格化しました。電子ジャーナルの提供にはかなりの設備投資が必要です。そのため、大出版社は電子ジャーナル化を進めることができましたが、中小出版社は資金面で困難を伴いました。そのため、かなりの数の中小出版社が大出版社に買収され、電子ジャーナルは寡占状態にあります。学術関係の電子ジャーナルでは、上位 10 社が論文数の 90% を占めています。

学会において出版は一番の柱です。そのため、出版業界に起こったことと同じことが学会に起こるのも、考えてみれば当然のことです。現在、世界規模で、大きな学会が小さな学会を吸収したり、傘下に収めたりしています。

電子情報通信学会は独立を保ちます。独立を保つために必要なものは出版の道具です。そこで、論文等のコンテンツを蓄積して検索するシステムの構築に着手しました。名称は IEICE Knowledge Discovery で、略称 I-Scover です。これまでも電子情報通信学会の論文等は電子化されてきましたが、論文誌、研究会、大会、国際会議がバラバラでした。今回構築するシステムは、それらを統一するとともに、優れた検索機能を提供します。検索は、文字列ではなく、意味で行います。例えば、最近の流行語の「M2M」を入力すると、一昔前の流行語の「ユビキタス」の論文も表示されます。

本年度、通信ソサイエティは過去最大額の投資を行い、システム構築を開始しました。来年度以降は学会全体の事業として進める予定です。エレクトロニクスソサイエティにも是非御協力をお願いいたします。

さて、エレクトロニクスソサイエティとしてではなく、会員として御協力いただきたいことがあります。それは、著作権法を守ることです。学会再編において、最後の切り札となるのが著作権です。A 学会と B 学会に著作権を二重譲渡した会員が多数いるとします。この違法状態は、B 学会が A 学会を吸収すれば解消されます。どうしても吸収に応じない学会に対しては、このような強硬手段によって吸収工作を進める方法があり得ます。

論文を投稿したら、ほとんどの場合、著作権を学会や出

版社に譲渡します。著作権と一口にいても、いろいろな権利があります。論文の著作権譲渡においては、通常著作権関係のすべての権利を譲渡します。

譲渡する権利には翻訳権も含まれます。したがって、A 学会の研究会で日本語で発表した論文を英語にして B 学会の国際会議で発表すると、著作権の二重譲渡になります。

翻案権も譲渡する権利に含まれます。翻案権とは、著作物を元に別の著作物を作ることです。A 学会の国際会議で発表した論文を長くし、いわゆる Extended Paper を B 学会の論文誌に投稿すると、著作権の二重譲渡になります。ある研究の論文の続きの研究の論文にも注意が必要です。続きの研究の論文の最初では、どうしても元の論文のことを書かねばなりません。それがあつ程度長いと、翻案に該当する可能性が生じます。

本会研究会原稿 1 ページ目のフッタに This article is a technical report without peer review, and its polished and/or extended version may be published elsewhere. と書かれていますが、elsewhere というのは事実上電子情報通信学会論文誌のみです。電子情報通信学会は、他学会論文誌への投稿を禁止しているわけではなく、転載許可で認めています。しかし、著作権譲渡ではなく、転載許可で受け付ける他学会論文誌はまずありません。

この法律は、学術の場に適合していないともいえます。しかし、だからといって、法律を破るのはよくありません。著作権の二重譲渡は詐欺罪に当たる刑法犯罪であり、金額が大きい事件では懲役 3 年の判決が出たこともあります。電子情報通信学会では著作権譲渡は無償ですが、他学会では対価を払っているところもあります。それはわずかな金額ですが、なぜわずかな金額でも対価を払うようになったのかというと、最後の切り札をより強力にするためです。最後の切り札を使われないよう、是非御協力をお願いいたします。

著者略歴：

1974 年東京大学工学部電子工学科卒、1979 年同大学院博士課程了。東京大学講師、助教授を経て、現在早稲田大学教授、国立情報学研究所客員教授。本会業績賞、本会論文賞、総務大臣表彰等受賞。本会フェロー。



【巻頭言】

「アジア展開の一つの試み」

エレクトロニクスソサイエティ会長

荒木 純道（東京工業大学）



今年8月7日から10日にかけて4日間タイのバンコック市の中心街にあるチュラロンコン大学を会場にしてTJMW2012が開催されました。このワークショップは4年前に大平孝先生（豊橋技科大）の呼びかけにより第1回目がKMINB大で開催されてから、3回目を迎えたこととなります。なお残念ながら昨年はタイの政治情勢が不安定であることなどにより、中止しています。

TJMWはIEICEのエレソにおける研専のマイクロ波研究会が主催して、IEICEのバンコックセッションや、通ソのアンテナ伝搬研究会などが共催団体に加わっています。今回は過去最高人数の200名以上の参加数でありました。日本側からも70名近い人数の方々が参加され、さらにチュートリアル講演、招待講演などの多大なご協力を日本人大学関係者や企業の研究者から頂きました。今回日本側のGeneral Chairとして、小生はここで改めて講演者の方々に感謝申し上げたいと思います。なおタイ側のGeneral Chairはチュラロンコン大のTuptim先生で、阪大の博士課程を修了し学位を取得された大の親日家としてもよく知られている方です。彼女はバンコックセッションの役員も務めておられます。

さてこのワークショップは幾つかの特色を持っています。

- 1) 会議参加登録費が無料であり、タイ学生の参加がとても容易、
- 2) 単一セッション構成で、全員で議論に参加、
- 3) ポスターセッションや研究室見学ツアーなどを通じてタイの学生と日本の学生との交流を図る、
- 4) 研究会発表に準じて、Proceedingは公開せず、国際会議や論文誌への投稿機会を残しておく、

などです。

また今回は最優秀発表賞に選ばれたタイ人学生3名にIEICEの研究会での発表の機会を与えるべく旅費支援の副賞を贈呈しました。

さらに日本側からは最新技術の紹介をする試みを行い、タイ学生に日本の技術の素晴らしさを改めて知ってもらうとともに、タイの大学と日本の大学との共同研究の促進や優秀なタイ人学生の日本留学勧誘の場となるようにと心がけています。

経済においても技術においても世界の成長拠点であるアジア諸国とのこうした草の根的な活動はIEICEの持続的発展のために今後とも欠かせない活動と考えています。

来年は11月初旬にカセサート大に会場を移して開催する予定であり、カセサート大電気工学科のDenchai先生がGeneral Chairに就任することが内定しています。またカセサート大工学部長にもTJMWへの全面的なご協力を要請したところです。今回TJMWに参加された大勢の学生さんが一人でも多くIEICEの会員になっていただければ、望外の喜びです。

著者略歴：

1978年東工大博士終了。1979～1980年テキサス州立大客員研究員。1985～1995年埼玉大電子工学科助教授。1993～1994年イリノイ州立大学客員研究員。

1995年～現在 東工大電気電子工学科教授。

1979年学術奨励賞 2006年論文賞 2007年フェロー。

マイクロ波研委員長、東京支部長など歴任。

2010年エレソ主催国際学会APMC2010実行委員長。



【巻頭言】

「論文誌への論文投稿のお誘い」

エレクトロニクスソサイエティ副会長（編集出版担当）

八坂 洋（東北大学）



昨年度に引き続き、本年度のエレクトロニクスソサイエティ副会長（編集出版担当）を担当しております、東北大学の八坂でございます。宜しくお願ひいたします。

エレクトロニクスソサイエティ(ES)では、会員の皆様方の最新の研究開発成果を発信する場として、和文論文誌(C)、英文論文誌(C)(Trans. on Electronics)、及びオンラインジャーナルのELEX(IEICE Electronics Express)を発刊しております。魅力ある研究成果発表の場を提供すべく、和英論文誌、ELEX では次の取り組みを進めています。

・和文論文誌

- 研究専門委員会推薦論文投稿強化による内容の充実
- 投稿論文の随時公開による短期間での掲載

・英文論文誌

- 充実した毎号特集号企画による優良論文の掲載

・ELEX

- 随時掲載による短期間での掲載（平均2ヶ月）
- WEBでの自由な論文閲覧（試行実施中）
- 質の高い論文の掲載料免除制度

これら論文誌の質、魅力のさらなる向上へ向け、今後も努力を重ねてまいりたいと考えておりますので、多くの論文ご投稿を賜りますよう宜しくお願ひ申し上げます。

さて、数年前に英文論文誌(C)編集委員長の職に就いておりました際に、英文論文誌のレターカテゴリーをELEXへ移行し、代わりにブリーフペーパーカテゴリーを新設する業務に携わらせて頂きました。歴代の英文論文誌委員長のご努力のお陰でスムーズにカテゴリー移行作業を終えることができ、ブリーフペーパーの投稿件数も徐々に増加しております。カテゴリー新設に携わった1人として、やはりこのカテゴリーに一度自ら投稿してみるべきであろうと考え、先日投稿してみました。その時の様子を少々。

- ・電子情報通信学会のホームページからESのホームページを開き、「論文誌」-「英文論文誌」の項目をクリック。すると英文の“The Information for Authors”画面が開く。投稿に関するいろいろな情報が閲覧できるが、投稿

サイトが何処かわからない。

- ・しかたがないのでESのホームページに戻り、「オンラインジャーナル」の項目をクリック。すると左側の「Menu」欄に「投稿のページ」という項目を発見し、クリック。
- ・「投稿論文仮登録（英文誌）」の項目をクリックすると会員番号とパスワードの問い合わせがあり、入力すると仮登録画面となる。必要事項を記入し、登録。
- ・仮登録が終了すると、“Confirmation Sheet of Manuscript Registration”と“Copyright Transfer and Page Charge Agreement”を送るよう電子メールで指示が届く。両者を指定の電子メールアドレスに送ると、数日して論文受付通知が届く。

- ・数週間して採択通知が届く。（その間査読プロセス）

- ・その後、ゲラ校正依頼が届く。確認し、別刷り部数の投入を行うことで一連の作業が終了。

このように、手続きは非常に簡単ですので、皆様、是非各論文誌への論文投稿をご検討いただければと思います。ただ、この投稿手続きを進める上で私なりに感じた点がありましたが、それは英文誌委員会へ提案することとします。

皆様におかれましても、是非各論文誌へ積極的にご投稿頂き、気づかれた要改善点を各論文誌委員会へご提案いただければと思います。ご提案は論文誌の改善及び活性化の大きな助けとなります。是非活発な論文のご投稿及び改善点のご提案を賜りますよう宜しくお願ひ申し上げます。

著者略歴：

1985年 九州大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了。同年、日本電信電話株式会社（NTT）に入社。以来、主に光通信用半導体光源、半導体光変調器、高機能半導体光集積回路デバイスの研究開発に従事。1993年 工学博士（北海道大学）。2008年4月より東北大学電気通信研究所教授。電子情報通信学会英文論文誌（論文誌C）編集幹事（2007～2008）、編集委員長（2009）。本学会以外に、日本物理学会、日本応用物理学会、IEEE/Photonics、各会員。